性倫理とキリスト教

平良　愛香

授業の目的

「平良さんなら既成の性倫理をぶち壊してくれると思って」と頼まれた講師の仕事。決して二つ返事で引き受けたわけではない。しかし「性」に対しての誤った知識，思い込みのために，セクシュアルマイノリティ（性的少数者）をはじめとするさまざまな人々が差別や抑圧を受けているだけではなく，自らも「性」を狭く考えてしまってその豊かさに気付けないまま生きづらくさせられている。その反面，どこまでが「許される」ことであるのか判断基準が曖昧になってしまったため，ときにはとても軽いものとして「性」を扱ってしまう。そういった現状に新たな指針をもたらすことができればと思い，仕事を引き受けた。

現在，性について興味があるにもかかわらず，真剣に考えたり話したりする機会というものがほとんどの人にはない。性倫理においては，自分が学んできたものだけが正しいと思いこまされ，多くの場合何の疑問をはさむ余地も与えられてこなかった。ところが実際には人によってかなりのずれがあったりする。ある人にとって決して許されないと思っていたことが別の人にとってはまったく問題でないことすらある。結婚前のセックス（性交渉）をいけないことと考える人もいれば，まったく問題なしとする人もいる。性産業に対する考え方もまちまちである。ある授業では，アメリカでは夫婦間でも強姦罪が成立するが，日本ではまだ成立しない，と話したところ，「日本でそれが認められていないのはおかしい」と言う意見と「夫婦で強姦罪が成立するアメリカはおかしい（性的な関係があることを前提に夫婦となっているはずだから）」と言う意見が学生から出てきた。注目したいのは，そういった学生の多くが「自分と違う考えを持つ学生いる」ということに驚いているということである。

そこでこの授業では，「正しい性倫理を学ぶ」のではなく，「性とは何か，性倫理とはどうあるべきか」をそれぞれが自分で考えることを目的とした。さまざまな考えがあることに気づき，さまざまな人間がいる中で，全ての人

に当てはまる性倫理はありえるのか，あるならば一体どのようなものなのか，それを授業全体で考えていく。例外のない，全ての人に当てはまる性倫理を，押しつけでなくそれぞれで考え，探り出していくというのがこの授業の目的である。

キーワードは「鵜呑みにしない」

授業の始まる前に約束事として必ず言っていること，それが「私の話を鵜呑みにするな，自分で考え，違うと思ったらなぜそう思うか考えろ」である。先生が言ったから正しい，と言うのであればそれぞれが考えもなく押しつけられている性倫理の上塗りをするだけである。そうではなく，自分が思い込まされてきたことを一旦崩し，それから考えることを大切にしなければならないのだから。（授業の中では既存の性倫理に真向からぶつかるような話も多く，人によっては拒絶反応が出てくることもある。そのようなことも配慮して事前に「鵜呑みにするな，大切なのは目を反らさずに考えることである」と伝えておく必要を感じている。）

キリスト教と自分

私はキリスト教の教会で牧師をしている。そういった意味ではキリスト教の専門家と言えるだろう。同時に男性同性愛者として自らカミングアウトして活動しているため，困難が伴うことも多い。キリスト教が同性愛に対して非寛容であった時代は今も続いているし，そもそも「性」について，古い窮屈な性倫理が時代の限界性を無視して現代でもまかり通っている。なぜこのような倫理が生まれたのかを知らされないまま，正しいと思い込まされているだけでなく，それを破ることが「罪」であると教えられる。善悪を自分たちで決め，多くのものを断罪し切り捨ててきたキリスト教が社会に対して犯してきた「罪」は決して少なくない。性倫理とキリスト教の授業では，そういったキリスト教の罪責を一キリスト者として反省を込めて語りつつ，それでもなお「神を愛すると同時に，自分を愛するように隣人を愛せ」と教えるキリスト教が示唆する新しい性倫理について，掘り出していく作業をおこなう。

授業の内容

前半「性の多様性を学ぶ」

既存の性倫理が男女二分主義（社会には男と女の２種類しか性別がないという考え方）と，異性愛主義（人間の性的指向は異性にむいているのがあたりまえという考え方）によって成立しているため，それ以外の性を持つ人々（セクシュアルマイノリティ，性的少数者，この言葉の持つ豊かさと問題点も授業で扱う）にとって生きづらい社会が構成されているだけでなく，倫理そのものが「全ての人には当てはまらない」という意味で不備であるのでは

ないか，ということを，その背景にあったであろうキリスト教の歴史を学びながら考える。

2003年度の例

第1回　講師自己紹介　男性同性愛者であること

第2回　講師自己紹介続き　キリスト教の話

第3回　性の多様性Ⅰ　私の出会ってきた人々

第4回　性の多様性Ⅱ　無限に広がる性と性倫理

第5回　結婚とは

第6回　模擬結婚式

第1回の授業では自分史を語りながら，なぜカミングアウト（公言）するのかを話す。自分の中にある閉じ込められた物を吐き出すためのカミングアウト，自分を知ってほしいためにするカミングアウト，同性愛者はみんなの周りにいるのだと気づいてもらうためのカミングアウト。それらはただの暴露ではなく，新しい関係性を築くために行われる命がけの行為であることを知ってもらう。履修登録の関係で第1回から出席できない学生も多いため，第2回では第1回のおおまかな説明から始まる。それに続き，キリスト教が同性愛者に対してどう考えてきたのか，キリスト教にとって聖書とはなんであるのか，クリスチャンは何を信じているのか，という話。

第3回，第4回では「生物学的性」「性自認」「性的指向」などについて学び，そのグラデーションの中で一人ひとりの性が異なるものであることを知ると同時に，既存の性倫理が必ずしもそれを踏まえていないことに気づかせる。セクシュアリティに関する用語集配布。

第5回，結婚の歴史にキリスト教がどう関わってきたか学ぶ中で，そこに生じたさまざまな歪み（男女不平等，パートナー絶対主義，性的少数者排除等）を知ると同時に，それぞれにとって結婚とは何かという新しい「結婚」の可能性を模索する。

第6回，チャプレンの上田牧師のご協力を頂き，名乗り出てくれた6人の学生に手伝ってもらってチャペル（新座）にて3組のペアで模擬結婚式を行なった。現在でもよく行なわれている「妻は夫に従え」という男女不平等の式（父親の所有物としての花嫁が新しい所有者である新郎に手渡さる形），男女対等な形を模索して生まれた形，そしてアメリカで行なわれたレズビアンカップルの式で用いられたものの三通りである。興味深いのは同性カップルの式文は異性同士でも何の問題もなく用いることができたということであった。入学ガイダンス以来，初めてチャペルに入ったと言う学生も多く，キリスト教との距離をわずかながら縮めることのできた意義ある時間であった。

後半「さまざまな性関係のあり方を

考える」

第7回　さまざまな性関係①同意のない性関係 痴漢，強姦，セクシュアルハラスメント

第8回　ゲストスピーカー　性産業を考える

第9回　さまざまな性関係②同意のある性関係　婚前・婚外交渉，近親「相」姦，SM他

第10回　ゲストスピーカー　キリスト教とセクシュアリティ

第11回　ディスカッション

第12回　ビデオ鑑賞「Priest 司祭」1994年イギリス映画

第13回　後半のまとめ　これから成長を続けるキリスト教

後半のポイントは「この性関係は，自分と相手の尊厳を十分に尊重しているか」ということである。同意のない性関係については言うまでもないが，同意がある中で，本当にお互いの尊厳が尊重できる行為であるのかをさまざまな証言をもとに検証してみる。お二人のゲストスピーカーを招き，セックスワーカーの視点や，現在のキリスト教へのさまざまな批判をお聞かせ頂いた。

第11回で行なわれたディスカッションでは以下の4つのテーマの中から各学生それぞれ一つ選んで参加してもらった。①男らしさ女らしさを求める動きがある中で，私たちはどう考えていくか，何ができるか。②家族の誰か（自分の子どもを含む）カミングアウトされたらどうしますか，どうありたいですか。③ポルノグラフィーについて考える。④あなたにとって性とは何ですか。ディスカッションはフィッシュボール方式（少人数によるディスカッションを残りのものが周りを囲んで聴き，最後に与えられた時間だけ自由発言を許される）で行なった。ほとんどの学生が人前で自分の意思を述べることに慣れていないため決して盛り上がったディスカッションだとは言えないが，それでも多くの学生が（指名されて）発言し，更に多くの学生が，他の学生の生の声を聞くと言う経験を貴重に思ったようである。ディスカッションの形式については今後の課題でもある。（前年には360名の学生がディスカッションできるように12の教室を借り切り，30名ずつに振り分けてみたが，盛り上がって時間が足りなくなったというグループから，ファシリテーターの平良が部屋に回ってくるまでまったく誰も話さなくて時間が過ぎるのを苦痛のまま待つしかなかったというグループまであった。）

授業のすすめ方と成績評価

当初ディスカッションを中心に授業を構成しようと考えていたが，履修者が多く，また人前で自分の意見を述べることに慣れていない学生達から声を引き出すのは大変困難だと分かり，とりあえず「講義」の形をとって授業はスタートした。ところが授業の終わり

にリアクションペーパーを出してもらうことにしたところ，さまざまな感想や質問が寄せられたため，次の授業でそれに応えるという形をとるようにした。授業の最初の15分はリアクション紹介の時間であり，あたかも自分がラジオのパーソナリティであるかのように感じる授業である。たくさんのリスナーがおり，放送の度に多くの感想が寄せられる。そのハガキやメールをもとに番組が構成される。そういったことを通じてさらにつっこんだ質問や深い感想が寄せられるようになった。中には「こんなことを体験し考えている学生もいるのだ，ということを授業の中で読んで紹介してほしい」ということを書いてくる学生もいる。また紹介した学生の声に対してリアクションがあることもある。教室の中では手を挙げて発言することができなくても，リアクションペーパーを用いてディスカッションをしていると言うことができるのかもしれない。（かなりまどろっこしさもあるが。）大人数の学生のリアクションペーパーをすべて読んで準備するのはかなり大仕事であるが，授業を生きたもの，学生のニーズに応えるものにするには不可欠だと考える。

授業はどうしても一方的に語ることに終始しがちだが，大抵授業の中で一度はクイズを出したりしてブレイクをとるようにし，気分転換を図っている。前年はアコーディオンを持ち込み，みんなで歌を歌ったこともあった。（セクシュアルマイノリティ・クリスチャンの中から生まれた新しい讃美歌を歌った。）

成績評価は出席日数と普段のリアクションペーパーによる。（感想や質問は評価可能なものではないが，ときどき授業の中で出した課題への解答が評価の対象となることがある。）また半分以上出席しているものの日数が全体の3／4に満たない場合はレポート提出によって補うことができるようにしてある。テーマは「この授業で学んだこと，考えたこと」。

学生の反応

同性愛者の在日イラン人男性の難民認定裁判に傍聴に来てくれた学生たち。自分にひかえている結婚について改めて丁寧に考え始めた女子学生。自分の中にあったさまざまな偏見に気づき，苦しみ，それを克服しようと思ったと話してくれた学生。授業で学んだことは学生たちの生き方にも大きな影響を与えているらしい。

「人それぞれ違う存在である」という発見。「人に迷惑をかけなければいい」という思考から「本当に誰にも（自分にも）迷惑をかけていないのか」「逆に人に迷惑をかけてでもすべきこともあるのでは」という新しい思考への変化。自分のこれからの生き方の模索。人間を大切にすることの意味。そして反省を繰り返しながらもその実現

を希望を持って確信し，歩もうとしているキリスト教の存在。授業を受けた学生達が学んだと言ってくれたことである。

たいら　あいか
（2003年度全カリ兼任講師）